

【桐一葉】 きりひとは(その2)

桐といえば、どうしてもこの歌に触れずにはいられません。

- ・ 桐の葉も踏み分けがたくなりにはけりかならず人を待つとなけれど

『新古今集』 式子内親王

(桐の葉が館付近の道に積もって人が訪れにくくなってしまった。秋はすぐそこまで来ているらしい。誰かを待っている訳ではないはずなのに寂しい思いがする)

やや独断が過ぎる大意かもしれませんが、私はこのように解釈しています。

この歌に関し多くの専門家は、遍昭の

- ・ わが宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしみに 『古今集』

人麻呂の

- ・ 秋山の黄葉を茂みまどひぬる妹を求めむ山路知らずも 『万葉集』

白居易の

- ・ 秋の庭には掃はずして藤杖に携はて、閑かに梧桐の黄葉を踏んで行く

『和漢朗詠集』

を典拠にした歌と解説しています。

勿論、的を射た指摘と思いますが、この歌に漂う格調の高さは式子のもの、宮中文化のものでしょう。

歌中の「人」を過度に想像せず、この歌を恋歌ではなく秋歌下に分類したところに『新古今集』編者の力量がうかがえます。

この宮廷女流歌人の香気を現代に引き継いでいるのが、皇后美智子様だと思います。

歌会始での群を抜いた秀歌には毎年感嘆させられます。

その歌には、式子内親王や宮内卿を彷彿とさせる宮中の上品な調べが認められます。

私はいわゆる皇室ファンではないつもりですが、短歌ファンの端くれとして、優れた歌に出会えば素直に称賛したいと思います。

ちなみに、坪内逍遙の処女戯曲は『桐一葉』です。専門の狂言作家から歌舞伎の脚本が解放され、歌舞伎界外部の逍遙が明治27年10月から『早稲田文学』に連載したものです。シェイクスピア史劇に触発されての創作だったのでしょう。

初演は日露戦争勃発の年、明治37年東京座。淀君＝中村芝翫、片桐且元＝片岡我当。

関が原の戦い以降の滅び行く豊臣家を舞台としたもので、豊臣家のために奮闘する片桐且元が「我が名に因む庭前の、梧桐ことごとく揺落なし（中略）栄枯盛衰、是非もなき定めじゃなあ」

と歎くところに題名の根拠があるようです。豊臣家の家紋が五三の桐であるところも題名に関わるのでしょうか。

今日では極めて稀な演目でしょう。私も観劇したことはなく、読本体に眼を通したに留まります。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~